樗詩拾遺

松本芳翠著　書海社編輯部輯

書海誌に掲載された「樗詩拾遺」と、同「樗詩拾遺訓読」を現代仮名遣いに直し、一部の語句に語意等を付しました。

題劫餘詩存

劫余詩存に題す。

閑人行迹豈須存。
戰後昏迷呵筆論。
翹望和平與文運。
詩篇留得付乾坤。

閑人の行迹　豈に存するを用いんや。
戦後の昏迷、筆を呵して論ず。
翹望す　和平と文運と。
詩篇　留め得て　乾坤に付す。

閑人…用事がなくて暇があり、のんびりしている人。
行迹…行跡。人がある物事を行ったあと。
呵して…(凍った筆をとかすために)筆に息を吹きかけて温める。
翹望…頭を高くあげて熱望する。
乾坤…天と地。

青霄君得神通川佳石而欲勒文房四寶之碑需題字並題詩

青霄君神通川の佳石を得て、文房四宝の碑を勒せんと欲し、題字並に題詩を需める。

文房四寶大東珍。
聖哲養眞朝夕親。
碑是神通河畔石。
方知千古自通神。

文房四宝は　大東の珍。
聖哲　真を養って　朝夕　親しむ。
碑は是れ神通　河畔の石。
方(まさ)に知る千古　自ら神に通ずるを。

大東…日本の異称。
聖哲…知徳が優れ、物事の道理に通じている人。
朝夕…いつも。毎日。
神通…霊妙不可思議で、何物にも妨げられず、何でも自由自在にできる。

千古…永遠。永久。

戊戌新年

昭和三十三年

戊戌履端春又歸。
戊戌の履端、春 又た帰る。

昭昭文化有餘煇。
昭々として 文化 余煇あり。

先鞭一犬攀星月。
先鞭 一犬 星月を攀(よ)じる。

夢繞渾球天外飛。
夢は渾球を繞(まと)って 天外に飛ぶ。

履端…新年を迎える。また、正月元日。
昭昭…曇りなく照り輝く様子。
余煇…沈みつつある夕陽の光。
先鞭…人に先んじて物事に着手する。先を越す。
攀じる…取ろうとよじ登る。
渾球…地球。
天外…天のかなた。

第十三回日展出品作見擬藝術院賞

第十三回日展出品作、芸術院賞に擬せられる。

斷雲一片度長空。
断雲 一片 長空を度(わた)る。

雲本無心只任風。
雲はもと無心、只だ 風に任す。

乍覺彩光映蓬華。
乍ら覚ゆ 彩光の蓬華に映ずるを。

黎明天地更融融。
黎明の天地 更に融々。

断雲…ちぎったように浮かんでいる雲。ちぎれ雲。
彩光…色どられた光。光彩。
蓬華…いぶせき住居。
黎明…薄暗い明け方。夜明け。
融々…のどかなさま。

懐故英蘭女史

懷曾俱履禹山川。
泉石煙霞在眼前。
深浅韶光春二月。
彩毫精妙女中僊。

故英蘭女史を懐う。
憶う 曾(かつ)て俱(とも)に覆(ふ)む 禹の山川。
泉石 煙霞、眼前に在り。
深浅の韶光、春二月。
彩毫 精妙、女中の仙(仙人)。

竹雨曰。女史曾與藝苑諸星。遠試禹域之遊。詩徵酒逐。極稱盛事。一朝驂鸞。風流頓盡。哀哉。

禹…中国。(禹は三皇五帝の神話伝説に継ぐ夏朝の創始者とされる。)
昭和六年春 芳翠先生は、仁賀保香城、河井荃廬、生出大璧、柳田泰麓、武田霞洞、川村驥山、西川靖盦、西脇呉石、柳田泰雲、**三浦英蘭**、山本李邨の文人と共に総員十二名で中国に遊ばれた。
泉石…泉と石。山や、川など自然の景色。
煙霞…もやと、かすみ。
韶光…春の明るい景色。また、春の日ざし。
彩毫…筆。
精妙…極めて細かく巧みなこと。

觀桐竹紋十郎初代五十回忌追善公演次三浦野方翁韻

桐竹紋十郎初代五十回忌追善公演を観て、三浦野方翁の韻に次す。

傳承至藝別開天。
妙韻才華迸似泉。
院賞贏來祭初代。
新興所作著鞭先。

至芸を伝承して 別天を開く。
妙韻 才華 迸(ほとばし)って泉に似る。
院賞 贏(か)ち来って 初代を祭る。
新興の所作、著鞭を先んず。

至芸…最高の技芸。
別天…別世界。
妙韻…美しい音色。妙なる調べ。
才華…優れた才能。
贏つ…自分の手に入れる。

著鞭…人に先立って事をする。

偶成

頻言現代也堪嗤。
戰後思潮澆薄時。
記得樗牛超越語。
藝標高揚嶽蓮奇。

頻(しき)りに現代を言う、也(また)嗤(あざわら)うに堪えたり。
戦後　思潮　澆薄の時。
記し得たり　樗牛　超越の語。
芸標　高く掲ぐ　嶽蓮の奇。

思潮…思想の流れ。その時代の思想の一般的な傾向。
澆薄…世の中の人情が薄い。
樗牛…牛歩のような樗庵主人＝芳翠先生(ご自分)を指された。
嶽蓮…富士山。

病牀吟

醫家戒與佛家同。
濟度人間有變通。
抛筆三旬唯面壁。
平心養素一牀中。

医家の戒は　仏家と同じ。
済度　人間　変通　有り。
筆を抛(ほ)って三旬　唯だ面壁。
平心　養素　一牀の中。

済度…困ったり苦しんだりしている境遇から救う。
変通…その時、その場に応じて、自由自在に変化し適応してゆく。
旬…十日間。→三旬…一ヶ月
面壁…壁に向かって座禅をする。
養素…生れつきの自然の性質を養い育てる。
牀…床。

祝大倉家嘉慶

一九五八・一〇・一〇　大倉集古館賀筵席上

大倉家の嘉慶を祝す。

喜齢翁伴古稀人。
同慶金婚五十春。
高閣千年集名寶。
簷牙啄處瑞雲新。

喜齢の翁は伴う　古稀の人。
同慶　金婚　五十春。
高閣　千年　名宝を集める。
簷牙　啄(ついば)む処　瑞雲　新たなり。

嘉慶…めでたい事がら。喜びごと。
齢…年齢。
簷牙…軒際に牙のように湾曲して突き出た垂木。
瑞雲…目出度いことの起こる兆しとされる(紫色の)雲。

祝川村驥山翁喜壽

川村驥山翁の喜寿を祝す。

醉筆蹣跚染白牋。
驥翁元是酒中僊。
驚人墨跡遍天下。
喜壽迎來書亦圓。

醉筆　蹣跚　白牋を染む。
驥翁　元　是れ　酒中の仙。
人を驚かす墨跡　天下に遍ねし。
喜寿　迎え来って　書も亦た円かなり。

蹣跚…よろめきながら歩く様子。
驥翁…川村驥山翁
円か…おだやかなようす。

戊戌十一月與書海社同人遊於伊豆山彌生莊席上率賦

戊戌(昭和三十三年)十一月　書海社同人と伊豆山弥生荘に遊び　席上率賦。

相携又作汗漫遊。
空水澄鮮豆北秋。
一醉長吟交下筆。
龍蟠鳳翥共悠悠。

相携えて又　作(な)す　汗漫の遊。
空水　澄鮮　豆北の秋。
一醉　長吟　交(こもごも)　筆を下す。
龍蟠鳳翥　共に悠々。

汗漫…席上率賦をさす。書海社の旅行では一人一人に韻字が配られ、各人が七言一句ずつを分担し，句ごとに押韻する柏梁体の遊びが通例だった。夕飯には七言一句を携えて出席した。
澄鮮…清く鮮やかに澄みわたる。
豆北…北伊豆。
龍蟠鳳翥…竜蟠虎踞。英雄・豪傑が機会を得ず、世に姿をあらわさずにいること。
悠々…遠く遙かな。

悼長谷川流石翁

淡雅交遊四十年。
應酬翰墨幾詩篇。
書壇君逝頓寥落。
清介孤高懐古賢。

長谷川流石翁を悼む。
淡雅の交遊　四十年。
応酬の翰墨、幾詩篇。
書壇、君逝いて頓(とみ)に寥落。
清介　孤高、古賢を懐う。

淡雅…飾りけがなく上品。
頓に…急に。にわかに。
寥落…荒れ果てて寂しいさま。
清介…清廉潔白で他人に影響されない。
孤高…ひとり超然として、誇りをもっている。
古賢…昔の賢人。

己亥新年

昨經大患幸全生。
迎歳書窓筆硯横。
恰値東宮連理慶。
太平氣象滿蓬瀛。

昭和三十四年新年
昨　大患を経て　幸に生を全うす。
歳を迎えて書窓、筆硯横たわる。
恰(あた)かも値(あ)う　東宮　連理の慶。
太平の気象、蓬瀛に満つ。

大患…重い病気。大病。
値う…まともに当面する。
東宮…皇太子の住む宮殿。東宮御所。
連理…夫婦の仲が睦まじいことの例え。

蓬瀛…東海にあり仙人が住むという、蓬莱・瀛州の二つの山。方丈とともに三神山とする。ここでは日本を指す。

新年試筆

試筆明窓底。
迎春瑞雪新。
茹今兼汲古。
書格自清眞。

試筆、明窓の底。
春を迎えて　瑞雪　新たなり。
今を茹(くら)い、また古を汲めば。
書格　自ら精真。

明窓…日光のよくさし込む、明るい窓。
瑞雪…めでたいしるしとされる雪。
茹う…食べる。
書格…書の品格。書としての風格。
精真…純粋で真実なこと。

偶成(庚子新春口占)

(昭和三十五年新春口占)

千載臨池古道存。
未曾阿世亂淵源。
群盲撫象弄饒舌。
洗耳欲聽先哲言。

千載　臨池　古道存す。
未だ曾って世に阿(あ)って　渕源を乱さず。
群盲象を撫して　饒舌を弄す。
洗耳　聴かんと欲す　先哲の言。

千載…千年。転じて、長い年月。
臨池…書道。
　中国後漢の張芝が池のそばで書道の稽古を続けたため、池の水がすっかり黒くなったという話が西晋の衛恒『四体書勢』その他に見える。
古道…古い時代の道義・学問。昔の道義。また、昔からのやり方。
渕源…物事の起源であり、根本をなすもの。根源。
群盲撫象…凡人には大人物や大事業の全容が理解できないことのたとえ。
　多くの盲人が象のからだをなでまわし、自分のさわった部分によってそれぞれの異なる意見をのべることで、象の姿が理解できないと。というインド発祥の寓話。さまざまな思想を背景にして改作されており、ジャイナ教、仏教、イスラム教、ヒンドゥー教などで教訓として使われている。

以下に仏教説話「六度集経」より引用。
王問之曰「汝曹見象乎」。對言我曹俱見。王曰「象何類乎」。持足者對言「明王象如漆箒」、持尾者言如掃帚。持尾本者言如杖。持腹者言如鼓。持脅者言如壁。持背者言言如高机。持耳者言如簸箕。持頭者言如魁。持牙者言如角。持鼻者對言「明王、象如大索」。復於王前共訟言「大王、象真如我言」。鏡面王大笑之曰「瞽乎瞽乎、爾猶不見佛經者矣」。（王は、「お前達は象を見たことがあるか」と聞いたが、見たことはないと答えた。王は「象とはどういうものだ」と聞いた。足を触った者は「大王様、象とは立派な柱のようなものです」と答えた、尾を持った者は箒のよう、尾の根本を持った者は杖のよう、腹を触った者は太鼓のよう、脇腹を触った者は壁のよう、背を触った者は背の高い机のよう、耳を触った者は団扇のよう、頭を触った者は何か大きなかたまり、牙を触った者は何か角のようなもの、鼻を触った者は「大王様、象とは太い綱のようなものです」と答えた。そして、王の前で「大王様、象とは私が言っているものです」と再び言い争いを始めた。鏡面王は大いにこれを笑って言った、「盲人達よ、お前達は、まだありがたい仏様の教えに接していない者のように、理解の幅が狭いのだね」。）
饒舌…多すぎるほど喋ること。多弁。
洗耳…汚れた事を聞いた耳をあらい、清める。俗世間のことを汚らわしいとすること。
『史記』「伯夷列伝第一」の皇甫謐の『高士伝』に「許由字武仲。堯聞致天下而讓焉、乃退而遁於中嶽潁水陽、箕山之下。堯又召爲九州長、由不欲聞之、洗耳於潁水濱。（皇甫謐の『高士伝』によれば、許由の字は武仲。堯が帝位を降りて、位を許由に譲ろうとしていると聞き、宮廷を退いて、中嶽のあたり、潁水の南、箕山のふもとに隠遁した。堯が再び召しだして、全国の長に任命しようとしたが、由は、これを聞きたくもないとして、潁水のほとりで耳を洗った。）
先哲…昔の立派な思想家・賢者。昔の哲人。先賢。前哲。先師。

小野道風公

東海書僊仰此公。　東海の書仙　此の公を仰ぐ。
柳蛙古訓誨童蒙。　柳蛙の古訓　童蒙に誨（おし）える。
練成豈止臨池道。　練成　豈に臨池の道に止（とどま）らん。
處世人間萬事同。　処世の人間　万事同じ。

道風…名前の読みは「みちかぜ」だが、現代では「とうふう」と有職読みすることが多い。
有職読み（ゆうそくよみ）とは、音読みして、その人に敬意を払ったり、親しみを示したりするもので、手紙の宛先の下に「様」・「殿」を付けるのと同様。「様」のその人の「様子」・「分身」、「殿」はその人の「館」の意味で、自分からの便りにより相手本人に万一にも災いが一緒に届くのを避ける意。
東海…道風は現在の愛知県春日井市出身。
書仙…書の名人。
柳蛙…道風は、自分の才能のなさに自己嫌悪に陥り、書道をやめようかと真剣に悩んでいる程のスランプに陥っていた時のこと、ある雨の日散歩に出かけていて、柳に蛙が飛びつこうと、何度も挑戦している姿を見て「蛙はバカだ。いくら飛んでも柳に飛びつけるわけないのに」とバカにしていた時、偶然にも強い風が吹

き、柳がしなり、見事に飛び移れた。これを見た道風は「バカは自分だ。蛙は一生懸命努力をして偶然を自分のものとしたのに、自分はそれほどの努力をしていない」と目が覚めるような思いをして、血を滲むほどの努力をするきっかけになったという。ただし、この逸話は史実かどうか不明で、広まったのは江戸時代中期の浄瑠璃『小野道風青柳硯』(宝暦4年(1754年)初演) からと見られる。その後、第二次世界大戦以前の日本の国定教科書にもこの逸話が載せられ、多くの人に広まった。

古訓…昔の人のいましめ。
童蒙…幼くて、道理の解らない子供。
誨(おし)える…教える。
練成…十分に鍛えて立派に仕上げる。
処世…社会の中で生活してゆくこと。世渡り。

催第八回書海社展於東京都美術館

書海社展を東京美術館に催す。

十歳苦辛磨一硯。　十歳苦辛　一硯を磨す。
東臺今日試霜毫。　東台　今日　霜毫を試みる。
淋漓墨鎮呉牋雪。　淋漓　墨は鎮む　呉牋の雪。
仰望天邊北斗高。　仰望　天辺　北斗高し。

十歳…十年。
苦辛…辛いことや難儀なことにあって苦しむこと。
東台…東京上野の山、東叡山をいう。
霜毫…霜のように白い筆の毛。
試みる…(筆を)使ってみる。
淋漓…感情・勢いなどが、表にあふれ出る様子。
呉牋の雪…画仙紙の白。
仰望…見あげる。
天辺…大空の果て。
北斗…北斗七星。

次韻以酬野方翁

次韻以て野方翁に酬ゆ。

三十年前二葉萌。　三十年前　二葉　萌ゆ。
槇櫨交蔭對秋晴。　槇櫨　蔭を交して　秋晴に対す。

白頭磨盡寒鴉墨。
閑仰緑雲紅樹榮。

白頭　磨し尽す　寒鴉の墨。
閑に仰ぐ　緑雲紅樹の栄。

二葉…芳翠先生の長女で谷村憙斎先生と結婚された奥様を思い出しますが、ここでは芳翠先生の研究会「二葉会」。
楨…ひめ椿の木。
櫨…枇杷の木。
寒鴉…冬のカラス。ここでは「真っ黒な」の意。（白と黒の色の対比）
緑雲…盛んに茂っている青葉。
紅樹…紅葉した木。（青と紅の色の対比）

已亥之歳枝翠浩堂閑石三君同迎華甲賦此以賀

三子同迎華甲年。
樗門執贄亦奇縁。
臨池自是長生術。
扶坐澄心文字禪。

已亥の歳　大内枝翠　吉田浩堂　日下部閑石　三君同じく華甲を迎える。此れを賦して以て賀す。
三子同(とも)に迎える　華甲の年。
樗門に贄(いけにえ)を執るも　亦　奇縁。
臨池　自ら是れ　長生の術。
扶坐　澄心　文字禪。

華甲…数え年六十一歳の称。還暦。華の字は十字が六個と一の字が一個、その故に華甲と書いて六十一歳とし、還暦という代りに使用する。
樗門…芳翠先生門下。
臨池…書道。（前述）
扶坐…如来の坐には、結伽扶坐、半伽扶坐があり、座禅には加えて正坐、あぐらなどの坐り方がある。ここでは正座かあぐら。
澄心…静かに澄んだ心。

祝内田洋行創業五十周年

往古文房四寶珍。
方今利器與年新。
乾坤淑氣魁於此。

内田洋行の創業五十周年を祝す。
往古　文房四宝の珍。
方今　利器、年とともに新。
乾坤の淑気　此に魁ける。

凌雪迎來五十春。

凌雪　迎え来る　五十春。

内田洋行…社名。1910年(明治43年)、南満州鉄道株式会社に勤めていた内田小太郎が中国の大連にて事務機を取り扱う貿易商を営んだのが始まり。戦後は国内で梵鐘などを売り、苦しい時期をしのいだが、その後現在の教育システム事業部の前身になる科学教材部を設立し、学校教育教材分野に進出するなど、次第に事業を拡大していった。なお、「洋行」とは中国語で貿易商の意味。
往古…遠くすぎさった、昔。大昔。いにしえ。
方今…いま。現在。
利器…便利ですぐれた道具や器械。
淑気…春の、穏やかで爽やかな気配。

賀郷友向井坐隠昇進七段

連破強豪樹偉勲。

郷友　向井坐隠が七段に昇進するを賀す。

強豪を連破して　偉勲を樹(た)つ。

往年選士已超群。

往年の選士　已に超群。

心圓技熟不知老。

心　円(まどか)に　技　熟して　老を知らず。

登閣七層凌碧雲。

登閣七層、碧雲を凌ぐ。

偉勲…大きな手柄。立派な手柄。偉功。
超群…多くのものの中で群を抜いて優れていること。衆に抜きん出ること。
心円…心が丸い。
登閣七層…七段に昇進する
碧雲…青くすんだ雲。

桃巷佐藤君見贈華甲記念雪鴻印譜賦之道謝

桃巷佐藤君　華甲記念　雪鴻印譜を贈られた。之を賦して謝を道(い)う。

白文和潤憶春風。

白文　和潤、春風を憶(おも)う。

朱字闌珊欺晩紅。

朱字　闌珊、晩紅を欺(あざむ)く。

鴻爪雪泥周甲篆。

鴻爪　雪泥　周甲の篆。

人圓技熟奪天工。

人　円(まどか)に　技　熟して、天工を奪う。

白文…文字そのものを刻す篆刻。押印すると文字が白くなる。
和潤…和らいで潤いがある。
朱字…文字を残して刻す篆刻。押印すると文字が朱くなる。
闌珊…盛りをすぎて衰えるさま。また、散り乱れるさま。
晩紅…盛りを過ぎた花の色。
雪泥鴻爪…雪どけのどろの上に残った鴻(鳥の一種)のつめの跡。人の一生または、事業などが、はかなくて跡が残らないことのたとえ。
蘇軾「和子由澠池懐舊」(子由の「澠池懐旧」に和す)より引用。

人生到処知何似　人生　到る処　知んぬ　何にか似たる
応似飛鴻踏雪泥　応（まさ）に似たるべし　飛鴻の雪泥を踏むに
泥上偶然留指爪　泥上に偶然として指爪を留む
鴻飛那復計東西　鴻は飛んで那（なん）ぞ復（ま）た東西を計らん
老僧已死成新塔　老僧　已に死しして新塔を成す
壊壁無由見旧題　壊壁には旧題を見るに由（よし）無し
往日崎嶇還記否　往日崎嶇たること還（な）お記するや否や
路長人困蹇驢嘶　路長く人困じて蹇驢嘶（いば）えるを

（人生という旅は何に似ているだろうか。それは雪や泥土の上に舞いおりた渡り鳥の足にも似ている。渡り鳥が泥の上にたまたま爪のあとを残しても、飛び去ってしまうと西にいったのか東にいったのかももうわからない。老いた僧はなくなって今や新しい墓石となってしまっているし、くずれた壁に書きつけた僕らの落書きはさがすこともできない。君はあの日の苦しい旅をおぼえているだろうか。路の遠さ、つかれた人々、くたびれたロバの嘶きを。）

周甲…還暦にあたる六十年。
天工…天のなせるわざ。自然の作用・働き。

祝石井雙石先生米壽

石井雙石先生の米寿を祝す。

古法雕蟲第一人。　古法　雕虫　第一人。
得心應手與年新。　得心　応手、年とともに新たなり。
先生磊磊如金石。　先生　磊磊（らいらい）　金石の如く。
八十八齢康壽春。　八十八齢　康寿の春。

石井雙石先生…昭和期の日本の篆刻家・書家。
雕虫…細かい細工を施す。
得心…よくわかって心から承知すること。納得。
応手…相手の打った手に応じて打つ手。
磊磊…度量が大きく、小さなことに拘らない様子。

金石…硬いもの、永久に変化しないもののたとえ。ここでは金石学、篆刻の意が加味されている。
康寿…「寿而康」あるいは「長寿安康」を縮約した言葉で、「長生きをして安らか」という意味。

次韻以謝野方翁見寄書海社新年會記

次韻以て野方翁が書海社新年会記に寄せられたを謝す。

縦横驅使筆鋒輕。　縦横　駆使、筆鋒　軽し。
活寫春筵師弟情。　活写す春筵　師弟の情。
不日刊成讀斯稿。　不日　刊成って　斯の稿を読めば、
萬千微笑机前生。　万千の微笑　机前に生ぜん。

活写…活き活きと写しとる。活き活きと描写する。
春筵…新年会。
不日…日ならずして。近日中に。近いうちに。

受昭和三十四年度日本藝術院賞

昭和三十四年度日本芸術院賞を受ける。

寄托生涯筆一枝。　生涯を寄托す　筆一枝。
對聯書就所人推。　対聯　書就って　人の推す所。
談玄觀妙餘光在。　談玄観妙　余光在り。
藝苑賞輝優渥辭。　芸苑の賞は輝く　優渥の辞。

談玄観妙…芳翠先生が日本芸術院賞を受賞した時に書かれた言葉「談玄悟道言　観妙滅塵想」。
余光…あり余って他にまで及ぶおかげ。余徳。
優渥…めぐみ深く手厚いこと。ねんごろ。

同　次三浦野方君見寄詩韻

同、三浦野方君の寄せられた詩韻に次す。

臨池樂道豈求名。　臨池　道を楽しむ　豈に名を求めんや。

門外唯聞鳥雀聲。　門外　唯聞く　鳥雀の声。
第一何人來剥啄。　第一何人か来て剥啄。
古梅新醁放香清。　古梅　新醁、香を放って清し。

剥啄…足音や、戸などをたたく、コツコツという音の形容。
新醁…新酒

〔原韻〕

電波傳道我師名。　電波　伝え道(い)う　我が師の名。
喜氣衝胸不作聲。　喜気　胸を衝いて　声を作(な)さず。
走到樗門呈祝酒。　走って樗門に到り　祝酒を呈す。
梅花悉白發香清。　梅花　悉く白く　香を発して清し。

同　次小松雪峰大人見贈詩韻

同、小松雪峰大人の贈られた詩韻に次す。

墨苑春秋並轡馳。　墨苑の春秋　轡(くつわ)を並べて馳す。
五風十雨百華宜。　五風十雨　百華宜し。
如今回首人寥寂。　如今　首を回らせば　人　寥寂。
劫後荊榛蔽地時。　劫後　荊榛　地を蔽(おお)う時。

轡を並べる…多くの人がそろって同じことをする。
五風十雨…農作に好都合な順調な気候のたとえ。転じて、世の中が平穏無事であること。
(五日目に一度風が吹き、十日目に一度雨が降ることで、これは農業の場合、農作物の生育に最も都合がよく、豊年の兆しであるという。)
『論衡』是応 に「風条(えだ)を鳴らさず、雨塊(つちくれ)を破らず、五日に一風、十日に一雨。」(風は枝を鳴らすほどの大風も吹かず、雨が適度に降って土の塊さえもこわさない、五日目ごとに一風あり、十日目ごとに一雨がある。)
百華…百花。いろいろな種類の花。
寥寂…心が満ち足りず、もの寂しい。
劫…きわめて長い時間のこと。

仏教などインド哲学では、極めて長い宇宙論的な時間の単位。梵語 kalpa の音写文字「劫波」の略。循環宇宙論の中で、1 つの宇宙（あるいは世界）が誕生し消滅するまでの期間と言われる。西洋では、まれにイーオン（aeon）と意訳されることがある。

荊榛…いばらと、はしばみの雑木のしげみ。

〔原韻〕

墨場精進盛名馳。　墨場　精進　盛名を馳す。

芳艸好花三體宜。　芳草　好花　三体宜し。

表彰今日豈無以。　表彰　今日　豈に以 無からんや。

書風逐怪欲傾時。　書風　怪を逐うて　傾かんと欲する時。

盛名…立派な評判。盛んな名声。

同　次小野榎陵君見寄詩韻

同、小野榎陵君の寄せられた詩韻に次す。

至樂唯知筆硯精。　至楽　唯だ知る　筆硯の精。

何圖今日浴斯榮。　何ぞ図らん　今日　斯の栄に浴せんとは。

五千子弟觀無限。　五千の子弟　歓び限り無し。

遠近寄書稱我名。　遠近　書を寄せて　我が名を称す。

至楽…この上なく楽しいこと。

〔原韻〕

芳翠先生筆益精。　芳翠先生、筆ますます精。

藝園乍聽喬遷榮。　芸園　乍ち聴く　喬遷の栄。

談玄觀妙寔堪仰。　談玄観妙　まことに仰ぐに堪えたり。

道業炳乎千載名。　道業　炳乎たり　千載の名。

喬遷…うぐいすが谷を出て高い木に移る。良い方へ移ることのたとえ。人の転宅や地位の昇進を祝っていう言葉。

道業…道化と事業。

炳乎…光り輝いて明らかな様子。

千載…千年。転じて、長い年月。千歳。

同　次鶴岡秀堂君見寄詩韻　同、鶴岡秀堂君の寄せられた詩韻に次す。

曾贈寒梅慰我神。　曾て寒梅を贈って　我が神(こころ)を慰む。
年年逢節想其人。　年々節に逢って　其の人を想う。
奇香遍及山中宿。　奇香　遍く及ぶ　山中の宿。
的礫樗門一段春。　的礫(てきらく)たり樗門　一段の春。

奇香…珍しい香り。
的礫…白く鮮やかに輝く様子。

〔原韻〕

臨池百歳妙通神。　臨池百歳　妙　神に通ず。
藝苑齊推第一人。　芸苑　斉しく推す　第一人。
院賞榮譽長不朽。　院賞の栄誉　長く朽ちず。
樗園獨占白梅春。　樗園　独り占う　白梅の春。

同　次氏家史山君見寄詩韻　氏家史山君の寄せられた詩韻に次す。

臨池長貫一精神。　臨池　長く貫く　一精神。
筆硯却磨心與身。　筆硯　却って磨く　心と身と。
六十七年誰夢想。　六十七年　誰か夢想せん。
叨恩今日侍楓宸。　恩を叨(みだ)りにして　今日　楓宸に侍するを。

楓宸…漢代、宮殿に楓(ふう)を植えたことから、天子のいる宮殿。

〔原韻〕

文墨樗翁技入神。　文墨の樗翁　技　神に入る。

榮褒今日更亢身。　栄褒　今日　更に身を亢(たかぶ)る。
温顔彷彿拈華笑。　温顔　彷彿たり　拈華の笑。
仰見恩師列紫宸。　仰ぎ見る　恩師の紫宸に列するを。

彷彿…ありありと心に浮ぶ。
拈華…拈華微笑の略。ことばを用いずに、心から心に伝えること。
釈迦が霊鷲山で説法した時、黙って蓮の花をひねって大衆に見せたところ、摩訶迦葉がただ一人その意を解して微笑していたのでこれに奥義を授けたという話から。
『聯燈会要』・『釈迦牟尼仏章』には「世尊在霊山会上。拈華示衆。衆皆黙然。唯迦葉破顔微笑。世尊云。吾有正法眼蔵、涅槃妙心、実相無相、微妙法門、不立文字、教外別伝。付属摩訶迦葉」(世尊、昔、霊山会上に在って、花を拈じて衆に示す。是の時、衆皆な黙然たり。惟(ただ)迦葉尊者のみ、破顔微笑す。世尊云く、「吾に正法眼蔵　涅槃妙心　実相無相　微妙法門あり。不立文字　教外別伝　摩訶迦葉に付嘱す)とある。また『大梵天王問仏決疑経』にも「正法眼蔵・涅槃妙心、微妙法門あり、文字を立てず教外に別伝して迦葉に付属す」とある。
紫宸…天子の御殿。(「紫」は紫微、「宸」は天帝のいる所)

同　次後藤芳川君見贈詩韻　同後藤芳川君の贈られた詩韻に次す。

自比山樗豈冀魁。　自ら山樗に比す、豈に魁を冀(こいねが)わんや。
辛酸世味愧塩梅。　辛酸の世味、塩梅を慙(はじ)る。
金風猶有訪三徑。　金風　猶　三径を訪ねるあり。
一簇晩香松下開。　一簇の晩香　松下に開く。

魁…他に先んじて事をはじめる。
金風…五行説(中国の思想で宇宙の万物はすべて、木・火・土・金・水の五行の相生、相克の力によって生成されるという説)で秋を金に配することから。秋の風。
ちなみに日本では、奈良県田原本町の奈良唐古・鍵遺跡から、大型の翡翠製勾玉を納めた薬箱が出土し、中に陰陽五行の四色の勾玉があたことから、弥生時代中期後半～後期初頭(紀元前後)には、弥生人が古代中国の陰陽五行思想や宇宙観を熟知していたのではと見られている。
三径…漢の蔣氛が庭に三つの道(三径)をつくり、松・菊・竹を植えたという話から、庭にある三つの小径。隠者の住いの庭にたとえる。
晩香…暮方の春。

〔原韻〕

書魁畢竟是詩魁。　書魁　畢(ことごとく)寛し　是れ詩魁。
自比山樗性似梅。　自ら山樗に比するも　性　梅に似たり。
凌轢氷霜凛能耐。　氷霜と凌轢して　凛として能く耐ゆ。
春風一夜百花開。　春風　一夜　百花開く。

凌轢…侮り踏みにじること。

次雪峰小松大人見似詩韻

雪峯小松大人の似(しめ)された詩韻に次す。

禽聲繞屋報新晴。　禽声　屋を繞(めぐ)って　新晴を報ず。
赴召薫風送一行。　召に赴げば　薫風　一行を送る。
咫尺龍顔應下問。　龍顔に咫尺して　下問に応ず。
賜餐翰墨老書生。　餐を賜う　翰墨の老書生。

禽…とり。鳥類。
龍顔…天子の顔。天顔。
咫尺…身分の高い人のすぐ近く。
下問…目下の者に質問する。

外房釣游　三首

一竿風月欲忘機。　一竿風月　機を忘れんと欲す。
來伍閑鷗舊釣磯。　来って閑鷗に伍す　旧釣の磯。
漫描汀沙成鳥迹。　漫に汀沙に描いて　鳥迹を成す。
白波忽寄奪之歸。　白波忽ち寄せて　之を奪って帰る。

一竿風月…魚釣りをしたり自然を楽しんだりして、世間の俗事を忘れることと
閑鷗…カモメ。

伍す…仲間にはいる。肩を並べる。
汀沙…水ぎわの砂原。浜。
鳥迹…文字。（許慎『説文解字』序に、「黄帝之史倉頡見、鳥獸蹄迒之迹、知分理之可相別異也、初造書契。（黄帝の家臣の蒼頡が鳥の足跡を見て文字をつくった）」とある。）

放艇隨波似泛空。
垂綸盡日學漁翁。
不關笭箵少佳獲。
飽領太平洋上風。

艇を放って波に随えば　空に泛(うか)ぶに似たり。
綸を垂れて　尽日　漁翁に学ぶ。
関せず笭箵　佳獲の少なきを。
飽領す　太平洋上の風。

綸…釣り糸。
尽日…一日じゅう。終日。
漁翁…漁師の老人。
笭箵…魚篭、魚籠。
佳獲…獲物。

罷釣歸來步暮煙。
平沙潮落下飛鳶。
高歌漁老盪舟去。
尺半銀鱗跳渚邊。

釣を罷(や)めて帰来、暮煙に歩(あゆ)む。
平沙　潮落ちて　鳶　飛び下る。
高歌して漁老　舟を盪(うご)かして去る。
尺半の銀鱗　渚辺に跳る。

暮煙…夕暮れに立ち上る煙。夕暮れの靄。
平沙…平らな砂原・砂地。
高歌…声高く歌う。高唱。
銀鱗…銀色のうろこ。転じて、波間などに光ってみえる魚。
尺半…一尺は約三〇・三センチメートル。その半分の十五センチメートルほど。

次鐵甕今田先生見惠詩韻

翰墨交情澹似僊。

鐵甕今岡先生の恵まれた詩韻に次す。
翰墨の交情　澹として仙に似たり。

一逢長結好鵞縁。
風塵不到臨池室。
煮茗論詩書案前。

一逢　長く結ぶ　好鵞の縁。
風塵　到らず　臨池の室。
茗を煮、詩を論ず　書案の前。

一逢…初対面。
鵞…鵞鳥といえば王羲之で、書道の意。次のような逸話が伝えられている。
「王羲之は幼い頃から鵞鳥が大好きだった。会稽(今日の浙江省紹興あたり)のある老婦人が飼っている一羽の大きな白い鵞鳥は、耳に心地よい澄んだ鳴き声をしていた。王羲之は大金でそれを買い取ろうとしたが、老婦人に断られてしまった。そこで、彼は親類と友人を連れてその声を聴きに行った。ところが老婦人は彼がやってくると聞いて、料理して彼らをもてなそうとわざわざ鵞鳥を殺してしまった。王羲之は大いに興ざめして、長い間嘆き続けた。その後今度は山陰(今日の浙江省紹興あたり)のある道士がいい鵞鳥を飼っていると聞きつけた王羲之は、大急ぎで見に行った。白い鵞鳥は思った通りことごとくまるでこの世の物とは思えないほどのもので、羲之は非常に気に入って、すぐに何羽か売ってくれるよう道士に頼みこんだ。道士は言った。「わが道観のために『道徳経』の一篇を書いて下されば、この鵞鳥の群れごと全部差し上げましょう」。羲之は快諾し、たちまちその写書を書き上げると、白い鵞鳥を一羽ずつ籠に入れて、大喜びで帰っていった。」
「蘭亭図」などに描かれている人物の中から王羲之を探すには、鵞鳥を探せばよい。王羲之の脇には必ず鵞鳥が描かれている。
風塵…風に巻き起こされる土ぼこりから転じて、わずらわしく、けがらわしい物事のたとえ。俗事・俗世間。
茗…茶。特に、番茶。
書案…机。

庚子十月游於昇仙峡

庚子十月　昇仙峡に游ぶ。

恠石呼雲龍上天。
奇巖臨水虎呑淵。
千容萬態谿窮處。
鞳鞳搖山懸瀑泉。

恠石　雲を呼んで　龍　天に上り。
奇巖　水に臨んで　虎　渕に呑む。
千容万態　谿　窮る処。
鞳鞳山を揺かして　瀑泉懸かる。

恠石…恠＝怪。奇妙な形の石。
千容万態…いろいろな状態。
鞳鞳…水や波の音の響くさま。鼓(つづみ)や太鼓の鳴り響くさま。
瀑泉…滝。

野方翁以余近什昇仙峽詩刻石添次韻詩而見贈即疊韻以却寄

野方翁余が近什昇仙峽の詩を以て石に刻し次韻の詩を添えて贈られた。即ち疊韻以て却寄す。

昇仙刻石欲摩天。　昇仙の刻石　天を摩せんと欲す。
猛虎嘯風龍潜淵。　猛虎　風に嘯(うそぶ)き　龍渕に潜む。
一片冰刀消酷暑。　一片の冰刀　酷暑を消し。
峭崖千仞挂飛泉。　峭崖　千仞　飛泉を挂(か)く。

峭崖…険しくそびえた崖。
千仞…山が非常に高いこと。また、海や谷が非常に深いこと。
飛泉…急に落下する水。滝。

臨池偶興

嘗上青山求一閑。　嘗て青山に上って　一閑を求む。
青山多事未全閑。　青山　多事　未だ全く閑ならず。
臨池忙了書樓裡。　臨池　忙了す　書楼の裡。
却得浮生半日閑。　却って得たり浮生　半日の閑。

一閑…ゆったりとして静かなひととき。
忙了…忙しさが終わる。
浮生…はかない人生。あてもない生活。

庚子十月熊本城復元竣工

片鎗勇武奮鷄林。　片鎗　勇武　鷄林に奮(ふる)う。
臨節忠誠景仰深。　節に臨んで忠誠　景仰深し。

肥後名城復元日。
一環呼醒少年心。

肥後の名城　復元の日。
一環　呼び醒す　少年の心。

熊本城…中世に千葉城、隈本城が築かれ、安土桃山時代末期から江戸時代初期にかけて加藤清正がこれを取り込み、現在のような姿の熊本城を築いた。日本三名城の一つとされ、「清正流」と呼ばれる石垣の上に御殿、大小天守、五階櫓などが詰め込んだように建てられ、一大名の城としては「日本一」であるとの評価がある。加藤清正は、豊臣秀吉の子飼いの家臣で、賤ヶ岳の七本槍・七将の一人である。その後も各地を転戦して武功を挙げ、肥後北半国を与えられた。秀吉没後は徳川氏の家臣となり、関ヶ原の戦いの働きによって肥後国一国を与えられ、肥後国熊本藩初代藩主となった。(ウィキメディアより)

片鎗…(加藤清正の)片手に鎗

勇武…勇気があって、武芸にすぐれていること。

鶏林…新羅の異称。(「三国史記」の故事によれば、新羅の脱解王が、城の西方の始林に白鶏の鳴くのを聞き、始林を鶏林と改めたという。)転じて、朝鮮の異称。

加藤清正は、文禄元年(1592年)からの文禄・慶長の役では、朝鮮へ出兵した。

景仰…尊敬してしたうこと。景慕。景仰。

一環…くさりの一つの輪。転じて、ある事柄の中で、全体に関係をもつもののある重要な一部分。

簓庵主人見贈戯畫集次野方翁詩韻以道謝

簓庵主人戯画集を贈られ、野方翁の詩韻に次し以て謝を道(い)う。

簓庵餘技畫中仙。
筆筆飄飄欲上天。
梅潤入軒蝸篆滿。
龍芽一椀鑑新篇。

簓庵の余技　画中の仙。
筆々に　飄　飄(ひるがえ)り　天に上らんと欲す。
梅　潤い　軒に入って　蝸篆満つ。
竜芽　一椀　新篇を鑑(かんがみ)る。

蝸篆…蝸牛(カタツムリ)の動いた跡。あたかも篆書のように見える。

谿泉君歌集出版記念會席上

三十年前過上州。
茂林寺畔慰吟眸。

三十年前　上州を過ぎ。
茂林寺畔　吟眸　慰(なぐさ)む。

生生流轉谿泉響。
滿耳清聲憶遠游。

生々流転　谿泉　響き。
耳を満たす清声　遠游を憶う。

吟眸…目に映る見事な景色の素晴らしさ。
生々流転…万物が生死をくり返しながら姿を変えていくこと。
清声…清音。すんだ音。
遠游…遠遊。学問・修行などのために、遠くの土地にいくこと。

辛丑元旦　昭和三十六年

昭和六六歳光新。
書海駸駸作法人。
鳥迩文華世冠絶。
啓明須燿日東眞。

昭和六六　歳光　新たなり。
書海　駸々　法人と作る。
鳥迩の文華　世に冠絶す。
啓明　須らく　日東の真を輝かすべし。

六六…六×六＝三十六。
駸々…ものごとの発達・進歩が速いようす。
冠絶…飛び抜けて優れている。最も優れている。
啓明…心が開けていて道理に明るいこと。
日東…日本の国の美称。

小野榎陵君見贈手獲生魚有詩次韻以謝

小野榎陵君手獲の生魚を贈られ、詩有り次韻以て謝す。

想見夜漁隈水涯。
繙書煖酒爇茅柴。
寒厨此日因君潤。
曙夢醒來剩巨鮭。

想見す　夜漁　隈水の涯。
書を繙(ひもと)き　酒を煖め　茅柴を爇く。
寒厨　此日　君に因って潤う。
曙　夢醒め来って　巨鮭を剰す。

隈水…川が曲がって入り込んだところ。

茅柴…火のついた茅(ちがや)や、柴がすぐ燃えつきてしまうように、酔ってもすぐさめてしまう薄い悪い酒。
爇…焼く。

次鳴雪君華甲自述韻

鳴雪君の華甲自述の韻に次す。

壯年曾識墨林雄。
圓熟今看華甲翁。
桃李滿門春可樂。
光風嶽雪共融融。

壯年　曾て識る　墨林の雄。
円熟　今看る　華甲の翁。
桃李　門に満ち　春　楽しむべし。
光風　嶽雪　共に融々。

華甲…数え年六一歳の称。還暦。
桃李…自分が推薦した人物・門下生。
光風…雨が晴れあがった後に吹く、さわやかな風。また、雨後のさわやかなけしき。
嶽雪…嶽の雪。
融々…のどかなさま。

聞温知居士晩秋翁記念碑竣工

温知居士晩秋翁の記念碑竣工を聞く。

淋漓遺墨出風塵。
温故知新華有神。
屹立豊碑衆齊仰。
千秋萬古徳成隣。

淋漓たる遺墨　風塵を出ず。
温故知新、筆に神　有り。
屹立する豊碑　衆　斉(ひと)しく仰ぐ。
千秋萬古　徳　隣を成す。

淋漓…感情・勢いなどが、表に溢れ出る様子。
風塵…世間のわずらわしい雑事。また、わずらわしい世の中。俗世間。俗塵。
温故知新…前に学んだことや古い言葉をもう一度甦らせて、新しい真理を悟ること。
『論語(為政篇)』に「子曰、温故而知新、可以為師矣。」(孔子がこうおっしゃった。「過去の古い事柄を再び考え、新しい事柄も知れば、他人を教える師となることができるだろう。」)とある。
「故きを温ねて新しきを知る」の後に「以って師たるべし」という言葉が続く。元々は、「煮詰めて冷えたスープ(羹)を温めなおして美味しく飲むように、古い伝統的な知識や教養を考え直して、新しい事柄の理解に役立てよ」という話で、「過去の知識を単純に詰め込むだけでは、人を指導する師にはなれない」というのが本来の意味です。このことから、「故(ふるき)きを温ねて」の「温」は、一般的には「たずねて」と読むが、「あたためて」と読むべきとの解釈もある。

屹立…高く大きく聳え立つ。そそり立つこと。
千秋萬古…永遠に。はるか過去から未来までずっと。（沈佺期の詩「佺山」に見える。）

辛丑四月念三與畊硯會諸子遊于野田

聚樂園席上次土方秦山詩韻

辛丑四月念三、畊硯会並に二葉会諸子と野田聚楽園に遊び、席上土方秦山の詩韻に次す。

聚樂園中櫻已飛。　聚楽園中　桜　已に飛び、
杜鵑花發翠成圍。　杜鵑　花　発いて　翠、圍を成す。
詩書講罷彷湖畔。　詩書　講じ罷(つか)れて　湖畔を彷(さまよ)えば、
群鷺澄潭散素輝。　群鷺　澄潭　素輝を散ず。

杜鵑…ほととぎす。
群鷺…おしどりの群れ。
澄潭…清くすんだ渕。
素輝…白い光。

書窓偶成

翰墨生涯慕古賢。　翰墨の生涯　古賢を慕う。
懐馳上下二千年。　懐いは馳す　上下二千年。
臨池久遠無窮已。　臨池　久遠　窮まり已むことなし。
求道心通不老僊。　求道の心は通ず　不老の仙。

翰墨…詩文・書画・学問など。
久遠…時がかぎりなくつづくこと。また、遠い昔。
求道…仏の教えを得ようと願い、それを求めること。求法。
不老…老衰せず、死なないこと。

辛丑五月與枝翠南谿憙齋赴郡山書道會業畢而探吾妻スカイライン之景觀六首

昭和三十六年五月　大内枝翠、中平南谿、谷村憙齋と郡山書道会に赴き、業畢って吾妻スカイラインの景観を探る六首。

次小野榎陵君詩韻

翰墨交遊淡淡清。　翰墨の交遊　淡々として清し。
一逢忽結十年情。　一逢　忽ち結ぶ　十年の情。
山川況復舊相識。　山川　況んや復た　旧　相識。
新樹臨風青眼迎。　新樹　風に臨んで　青眼に迎う。

一逢…初対面。
相識…たがいに相手を知っていること。また、その人。知り合い。知人。

同　磐梯熱海温泉席上率賦　示野内謙治鶴齋兄弟

同、磐梯熱海温泉席上率賦、野内謙治　鶴齋兄弟に示す。

卿與樗翁有宿縁。　卿　樗翁と　宿縁　有り。
海南北嶺遠相牽。　海南　北嶺　遠く相　牽(ひ)く。
昂揚文化功成日。　文化を昂揚して　功　成るの日。
共究吾妻連嶽巓。　共に究む　吾妻　連嶽の巓。

昂揚…ある気分・精神などが，高まり強くなる。また、高め強くする。
巓…いただき。山の頂上。

同　五色沼

雨餘連嶽絶纖埃。　雨余の連嶽、纖埃を絶す。

雲上壯遊何快哉。
一切經山噴烟外。
寂光五色沼湖開。

雲上の壮遊、何ぞ快なる。
一切　経山　噴烟の外。
寂光　五色沼湖　開く。

繊埃…細かいほこり。繊塵。
壮遊…盛んな遊覧。
経山…過ぎて行く山。
寂光…寂静(=煩悩や苦しみがない)の真理から発する真智の光。

同　浄土平

快車遠騁白雲關。
颯颯天風拂翠鬟。
登覧標高千六百。
磐梯殘雪指呼間。

快事遠く騁(は)す　白雲の関。
颯々たる天風　翠鬟を払う。
登覧　標高千六百。
磐梯の残雪　指呼の間。

快事…気持ちのよい出来事。胸のすくような事件。
颯々…風がさっと吹くようす。また、その音の形容。天風…空を吹く風。あまつかぜ。
翠鬟…輪型に巻いた、美人の艶々しいまげ。
指呼…呼べば答えるくらいの近い距離のたとえ。

同　不動澤

羊腸山路度崔嵬。
原始林羅新翠堆。
不動橋邊駐車憇。
石楠花綴斷崖隈。

羊腸たる山路　崔嵬を度る。
原始の林羅　新翠　堆(うづたか)し。
不動橋辺　車を駐めて憇う。
石楠花は綴る　断崖の隈。

羊腸…山道などが、羊の腸のように曲がりくねっていること。

崔嵬…山の、石や岩がごろごろして高く険しい様子。また、建物が高く聳えている様子。
林羅…森羅。樹木が限りなく茂り並んでいる様子。
石楠花…しゃくなげ。つつじ科の常緑低木。初夏、うす紅色または白色のつつじに似た花をつける。

同　泊土湯温泉而聽俚謠得一絶句　磐梯竹枝

同、土湯温泉に泊して俚謠を聴き一絶句を得たり。磐梯竹枝。

磐梯歌曲慰羈心。
磐梯の歌曲　羈心を慰む。

晏起坐湯杯可斟。
晏起　湯に座し　杯　斟(く)む可し。

別有清流潤田野。
別に清流有って　田野を潤おす。

滿山竹露是黄金。
滿山の竹露は　是れ黄金。

羈心…旅心。
晏起…朝おそく起床すること。朝寝坊する。(『礼記』内則)
竹露…笹の露。

辛丑八月寄有快師参籠在八莖不動堂

辛丑八月有快師参籠して八莖不動堂に在るに寄す。

遠避炎塵訪碧山。
遠く炎塵を避けて　碧山を訪う。

白雲漠漠鎖禪關。
白雲　漠々　禅関を鎖(とざ)す。

導師入定無人語。
導師　定に入って　人語無し。

泉響蝉聲終日閑。
泉響　蝉声　終日閑なり。

炎塵…暑い日中のほこり。
碧山…木の青々としげった奥深い山。
漠々…広々として果てしのない様子。遠く遙かな様子。広漠。
禅関…澄み渡って迷いが無い清らかな心境。
泉響…泉の響き。

書懐

志士同憂上一船。
利名擲去付雲煙。
手排妖霧回狂瀾。
欲答翰林古聖賢。

志士　同憂　一船に上る。
名を利すを　擲(なげう)ち去って　雲煙に付す。
手に妖霧を排して　狂瀾を回らす。
答えんと欲す　翰林の古聖賢。

雲煙…書画の墨色・筆跡が鮮やかなこと。(杜甫「飲中八仙歌」に「揮毫落紙如雲煙」とある。)
妖霧…害を与える悪い霧。悪霧。
狂瀾…(「書海」という海に、)荒れくるう大波。

題畫

獨歸荷笠僧。
門外緑層層。
鐘響催斜照。
榴花紿法燈。

独り帰る　荷笠の僧。
門外　緑　層層たり。
鐘響　斜照を催し。
榴花　法灯を紿(あざむ)く。

荷笠…笠をかぶった僧侶
層層…濃淡に鬱蒼と茂っている。
榴花…真っ赤に咲いた石榴(ざくろ)の花。
法灯…迷いの暗黒を照らす仏法を灯火にたとえたことば。

觀國技

龍争還虎闘。
土俵拂沙看。
虚實阿吽妙。

国技を観る。
竜　争い　還(また)　虎　闘う。
土俵　沙を払って看る。
虚実　阿吽の妙

令人手握汗。　人をして手に汗を握らしむ。

沙…砂。
阿吽…＝阿吽の呼吸。相撲の仕切りで、立ち上がろうとする両力士の気合い。

第十回書海社展所感　書海社展　所感。

書悔展觀茲十回。　書海展観　茲に十回。
龍蟠鳳翥賑東臺。　龍　蟠(わだかま)り　鳳　翥(と)んで　東台を賑わす。
逐年驚目駸駸迹。　逐年　目を驚かす　駸々の迹。
戰後文華發緒來。　戦後の文華　緒を発して来る。

東台…東京上野の山、東叡山をいう。
逐年…年を追って物事の程度が進むようす。年とともに。年年。
駸々…物事の発達・進歩が速い様子。
緒…物事の始め。いとぐち。端緒。

悼野内謙治翁　野内謙治翁を悼む。

一結兩心元有因。　一つに結ぶ両心　もと因　有り。
浮生行路夢耶眞。　浮生の行路　夢か真か。
同遊如昨今何處。　同遊　昨の如し　今　何れの処ぞ。
不動橋邊觀語人。　不動橋辺　観語の人。

両心…二人のそれぞれの気持ち。
浮生…定まりのない、はかない人生。
行路…生きてゆく方法。世わたり。

辛丑秋以事赴關西爲負十和田探勝之約

纔(＝僅)愉閑而登叡山

辛丑の秋　事を以て関西に赴き　為に十和田探勝の約に負う。僅かに閑を偸んで叡山に登る。

孤負白雲紅葉圖。　孤負　白雲　紅葉の図。

却携俗事赴西都。　却って俗事を携えて　西都に赴く。

飆車飛棧文明澤。　飆車　棧を飛んで　文明の沢。

閑駕叡山望太湖。　閑に叡山に駕して　大湖を望む。

孤負…そむく。
俗事…日常のくだらない事がら。世俗の雑事。
西都…関西。
飆車…ロープウェイ。

飆(つむじかぜ)の車で、ロープウェイ。芳翠先生の造語は、師の土屋竹雨をも唸らせた素晴らしい閃き・発想がある。これこそが（黒で書くことによって出来る)「白を書く」、先生の瞬時の判断に繋がるように思う。以前、松川先生が「楷書千字文」を分析し、説明された折り芳翠先生は「そうですか、でも、僕はそんなこと考えていませんよ。」と言われたそうです。瞬時の閃きなのでしょう。
しかし、やや暫く紙に点をお書きになっている先生に尋ねると「滲みがチョット…。」と言われ、また点を書かれていました。「私は偶発的な表現に甘んじる芸術家ではありません。職人です。」と言われた先生が忍ばれます。

戯寄友人

禪關一別已經霜。　禪関　一別　已に霜を経たり。

欲報近情難作章。　近情を報ぜんと欲すれども　章を作し難し。

白紙寄君君讀破。　白紙君に寄す　君読破せよ。

無言或勝有言長。　無言　或は勝らん　有言の長きに。

禪関…澄み渡って迷いが無い清らかな心境。

讃秀峰句集淡雪

秀峰の句集淡雪を読む。

歸依佛法夙超群。
心與毫端正不分。
十七言詩更無垢。
眞如月照澹如雲。

帰依　仏法　夙(つと)に超群。
心、毫端と　正　分かたず。
十七言詩　更に無垢。
真如の月は照らす　澹如の雲。

帰依…信仰して、仏の威徳にすがる。
超群…普通の人をのりこえて、ひときわすぐれている。
毫端…毛の先端。また、きわめて微細なもののたとえ。
十七言詩…俳句。五＋七＋五＝十七。
無垢…煩悩から離れ、汚れのないこと。煩悩のアカがないこと。
真如…変わることのない、万物の真性。永久に変わることなく、かつ、現実そのものである真理。
淡如…しずかで安らかなさま。

祝川村驥山翁列藝術院會員

川村驥山翁が芸術院会員に列するを祝す。

夢逐八僊秋興歌。
函山依舊白雲多。
忽看衣錦還鄉客。
朝向楓宸佩玉過。

夢は逐(お)う八仙　秋興の歌。
函山　旧に依って　白雲多し。
忽ち看る　衣錦還郷の客。
朝に楓宸に向って　佩玉して過ぐ。

函山…箱根山。箱根は、古くは「函根」とも書いた。
衣錦還郷…出世して誇らしげに故郷に帰る。故郷ににしきを飾る。
『梁書』劉之遴伝に「高祖謂曰、卿母年徳並高。故令卿衣錦還郷、盡榮養之理。」（高祖謂いて曰く、卿の母は年徳並びに高し。故に卿をして錦を衣て郷に帰り、栄養の理を尽くさしめんと。）とある。高祖とは梁の武帝、蕭衍。他に『梁書』柳慶遠伝、『南史』柳慶遠伝、『南史』劉之遴伝に見える。
楓宸…漢代、宮殿に楓を植えたことから、天子のいる宮殿。　佩玉…身分の高い人が大帯にかけて飾りとした玉。身分の高さによって玉の種類が違う。

辛丑歳除

少年客氣志青雲。

少年　客気　青雲に志す。

羅病閑投翰墨群。
五十餘年苦兼樂。
凝爲眞艸二千文。

羅病　閑に投ず　翰墨の群。
五十余年　苦と楽と。
凝って為す　真艸二千文。

客気…一時的の勇気。
青雲の志…出世して高い地位につこうと願う大きな志。功名心。
羅病…病気にかかる。

迎新送舊歲星分。
試筆悠悠伴白雲。
齡近古稀無報效。
聊貽眞艸二千文。

新を迎え　旧を送って　歳星　分る。
試筆　悠々　白雲を伴う。
齡　古稀に近く　報　效　無し。
聊か貽(のこ)る　真艸二千文。

歳星…木星がほぼ十二年で天を一周するのを規準にして一年(歳)をきめたことから、木星をいう。

壬寅元旦七十自述

誰言七十古來稀。
鐵硯未穿將夕暉。
願把巨毫題碧落。
百年天地自然歸。

誰か言う　七十古来稀と。
鉄硯　未だ穿(うが)たず　将に夕暉ならんとす。
願くば巨毫を把って　碧落に題し。
百年　天地　自然に帰せん。

夕暉…夕輝。夕日のこと。また、夕方の日影。
巨毫…巨大な筆。
碧落…青空。

同

閱書滿腹養心泉。

書を閲して　腹を満たし　心の泉を養う。

落筆虚懐法自然。
一硯輕磨人漸老。
明窓笑迓古稀年。

落筆　虚懐　自然に法(のっと)る。
一硯　軽く磨き　人　漸く老い。
明窓　笑って迓(むか)う　古稀の年。

落筆…たわむれ書き。
虚懐…わだかまりのない心。私欲のない心。

江原氏見贈盆梅賦此以道謝

江原氏　盆梅を贈られ、此を賦して以て謝を道う。

搓牙疎影憶孤山。
破曉盆梅初綻顔。
江客贈吾春一塢。
佳香滿室白斑斑。

搓牙たる疎影　孤山を憶う。
曉を破って盆梅　初めて顔を綻ばす。
江客　吾に贈る　春一塢。
佳香　満室　白　斑々。

搓牙…木の枝や石が、角張ってひっかかるさま。
疎影…月光などにてらされて、まばらに映る影。

寄田邊古邨君

田邊古邨君に寄す。

山房夜話書筵説。
反覆讀來悲憤長。
狂瀾誰能回既倒。
欣君警世大詞章。

山房の夜話　書筵の説。
反覆　読み来って　悲憤　長し。
狂瀾　誰か能く　既倒に回す。
欣(よろこ)ぶ　君が警世の大詞章。

悲憤…悲しみ憤る。
狂瀾…始末がつかないほど物事が乱れた状態。
既倒…すでにたおれている。(狂瀾を既倒に回らす。)
警世…社会や世間の人のあやまりをいましめ、警告を与える。

四月下澣與同人諸公上函嶺

四月下澣　同人諸公と函嶺に上る。

同志相携上碧山。
清談事過尚餘閒。
逍遙須接峰巒氣。
帶得白雲泉響還。

同志　相携えて　碧山に上る。
清談　事過ぎて　尚　間を余す。
逍遙　須らく接すべし　峰巒の気。
白雲　泉響を帶し得て還らん。

碧山…木の青々としげった奥深い山。
清談…むかし中国で、俗世の混乱を避けて行われた、老荘の思想にもとづく談論。
(転じて)俗世間をはなれた、学問・芸術などに関する高潔な談話。
逍遙…気ままにあちこちを歩き回ること。そぞろ歩き。散歩。
峰巒…連なった山々。
泉響…泉の音。

同　懐舊

長齋敗紙積成山。
偶訪白雲求一閒。
曾是八僊豪興地。
浩然養素洗塵還。

長齋　敗紙積んで　山を成す。
偶(たま)に　白雲を訪えて　一間を求む。
曾て是れ八仙　豪興の地。
浩然養素、塵を洗って還らん。

豪興…ぜいたくにすぎる遊び。豪遊。
浩然…心が広くゆったりしている様子。
養素…うまれつきの自然の性質をやしない育てる。

同　過蘆湖

錦繡新衣蔽四山。
湖光探索太初閒。

同、芦ノ湖を過ぐ。
錦繡の新衣　四山を蔽(おお)う。
湖光　探索　太初の間。

恨無倒暎富峰影。
飛艇攬波頻往還。

恨むらくは倒暎　富峯の影無し。
艇を飛ばし　波を攬(みだ)して　頻(しき)りに往還。

錦繡…花・紅葉など、美しい眺めのたとえ。
太初…天地がまだ分かれていない混沌とした状態の時の、万物の根源。
倒暎…湖に写る(逆さ富士)。
富峯…富士山。

同　索道上早雲山

同、索道　早雲山に上る。

新緑參差山又山。
晩櫻點綴翠微閒。
一條鐵索鞭天馬。
咫尺孱顔歡喜還。

新緑　参差たり　山又山。
晩桜　点綴　翠微の間。
一条の鉄索　天馬に鞭ち。
孱顔に咫尺し　歓喜して還る。

参差…並び連なるさま。
点綴…ものがほどよく散らばっていて全体が調和していること。また、ものをほどよく散らばらせてそれをつづり合わせ、全体を調和させること。
翠微…山のいただきに近い所。八合目あたり。
鉄索…鉄の太い針金をより合わせた綱。鋼索。ケーブル。
天馬…駿馬。ここではケーブルカー。
孱顔…山がやせほそって険しいさま。
咫尺…すぐそばまで近づく。

題　畫

風定喬林靜。
禪聲送夕陽。
釣磯人去盡。
餘照在長楊。

風定まって　喬林　静かなり。
蝉声　夕陽を送る。
釣磯　人去り尽し。
余照　長楊に在り。

喬林…喬木の林。
長楊…垂れ下がった柳。

祝田村嶺風榮轉東歸　田村嶺風の栄転東帰を祝す。

東西隔絶幾經年。　東西　隔絶　幾たびか年を経たり。
君去文場頓寂然。　君去って　文場　頓(とみ)に寂然。
尤喜榮歸近門巷。　尤も喜ぶ　栄帰　門巷の近きを。
欲追翰墨舊因緣。　追わんと欲す　翰墨の旧　因縁。

隔絶…遠くはなれて連絡がとだえる。
寂然…ひっそりとして静かなようす。
栄帰…衣錦栄帰。成功して故郷に錦を飾る。
門巷…家の門と門前の道。(我が家の近くに戻ってきたの意。)

五月初二驥山館開會式余病軀不能參列即賦此聊表祝意

五月初二　驥山館開会式、余　病躯参列する能わず、即ち此を賦して聊か祝意を表す。

驥翁八秩駕長風。　驥翁　八秩　長風に駕し。
高閣凌雲翰墨功。　高閣　雲を凌ぐ　翰墨の功。
禹域同遊繼歡遠。　禹域　同遊　歓を継いで遠し。
藥爐媛酒頌竣工。　薬炉　酒を緩めて　竣工を祝す。

八秩…八十歳。
長風…遠くまで吹いていく雄大な風。
禹域…中国。

九月與史山谿泉兩君遊于十和田湖八甲山麓

九月　氏家史山　齋藤谿泉両君と十和田湖に遊ぶ。八甲山麓。

霜樹連天大麓閑。
仰望八甲憶冰山。
進軍風雪人何處。
追夢車馳錦繡間。

霜樹　天に連りて　大麓閑なり。
仰望　八甲　冰山を憶う。
軍を風雪に進める　人何れの処ぞ。
夢を追うて車は馳す　錦繡の間。

霜樹…霜の立ちこめた樹木。
大麓…大きな山麓。
錦繡…花・紅葉など、美しい眺めのたとえ。

同　奥入瀬溪流

巨巖蘚石瀬谿秋。
紅葉蒼苔相映幽。
處處飛泉裁錦帶。
白雲與水後先流。

巨巖　蘚石　瀬谿の秋。
紅葉　蒼苔　相映じて幽なり。
処々　飛泉　錦帶を裁つ。
白雲　水と後先して流る。

蘚石…苔石。
瀬谿…水がはげしく砕けて流れる渓谷。
蒼苔…緑の苔。
飛泉…急に落下する水。滝。

同　十和田湖

畫船解纜度烟波。
水湛玕藍山欝峨。
竹樹石泉咸祕邃。
湖神窈窕統林蘿。

画船　纜を解いて　烟波を度る。
水は玕藍を湛え　山は欝峨。
竹樹　石泉　咸く秘邃。
湖神　窈窕　林蘿を統(す)べる。

烟波…靄のかかったように霞んで見える波の連なり。
玕藍…緑色を帯びた暗い青色。藍色。
欝峨…鬱蒼として険しい。
竹樹…竹林。
石泉…岩の間からわく泉。
秘邃…ひそかに奥深い。
窈窕…しとやかで美しいようす。上品で奥ゆかしい様子。
林蘿…林中に茂る女蘿(サルオガセ)。
サルオガセとは、樹皮に付着して懸垂する糸状の地衣(コケ植物に似た菌類)

同　大湯温泉

霊泉一浴洗征塵。
鼎坐同袍把酒親。
老妓嫣然頻進膝。
三絃擲去話青春。

霊泉　一浴　征塵を洗う。
鼎坐　同袍　酒を把(と)って親しむ。
老妓　嫣然　頻(しき)りに膝を進め。
三絃　擲ち去って　青春を話す。

霊泉…病気に対してききめのある温泉。
征塵…旅。
鼎坐…三人が三方から向かい合ってすわる。
袍…わたいれ。
嫣然…にっこりと笑うようす。
三絃…三味線の別称。

同　車過盛陵

閑馳車駕過盛陵。
奇迹巨櫻穿石稜。
可喜山阿舊城趾。
白雲紅葉共層層。

同、車　盛陵を過ぐ。
閑に車駕を馳せて　盛陵を過ぐ。
奇迹　巨桜　石稜を穿(うが)つ。
喜ぶべし　山阿の旧城趾。
白雲　紅葉　共に層々。

石稜…ごつごつした岩石。

山阿…山のくま。山の入りくんだ所。

壬寅歳除口占

桃栗三年柿八年。
春花秋實逐時遷。
生生流轉即公案。
七十結跏文字禪。

桃栗三年柿八年、
春花　秋実　時を逐(お)って遷る。
生々流転　即公案。
七十　結跏　文字禪。

生々流転…万物が生死をくり返しながら姿を変えていくこと。
公案…役所の公式文書に似て、厳正であっておかすことができないものであるところから、禅宗で悟りの手引きとするため、座禅しようとする者に与える問題。古則とも。
結跏…「結跏趺坐」の略。仏像や禅定修行で座禅をくむ時のすわりかたの一つ。あぐらをかき、右足を左ももの上に、左足を右ももの上に置き、足の裏を上にむけて組む。

癸卯新年　昭和三十八年

白兎春歸豊艸原。
試毫和氣滿樗門。
將軍創製管城子。
文徳長馳翰墨園。

白兎の春は帰す　豊草原。
試毫　和気　樗門に満つ。
将軍　創製す　管城子。
文徳　長く馳す　翰墨の園。

管城子…筆。韓愈が筆を擬人化して毛穎と名づけ「毛穎伝」をつくり、作中の毛穎が秦の始皇帝によって管城に封ぜられ、自分のことを管城子といったことから。
以前、谷村先生は、「平筆」の筆法では「筆先を研ぐ」ことから、初心者が簡単に研げるよう、筆管を二等辺三角形にした筆を考案され、「管城」と名付けられた。
文徳…学問・教育などによる徳。

癸卯二月初二奉悼大倉聽松先生　癸卯二月初二大倉聽松先生を悼み奉る。

東海文華天未明。
巨星忽堕悄無聲。
劫餘雄志猶難止。
燦燦靈南不夜城。

東海の文華　天未だ明けず。
巨星　忽ち堕ちて　悄として声なし。
劫を余す　雄志　猶お止み難く。
燦々たり　霊南の不夜城。

大倉聴松先生…大倉　喜七郎(一八八二年六月十六日－一九六三年二月二日)大倉財閥２代目総帥。男爵。
悄…うれえる。心細げに心配する。しょんぼりする。
雄志…おおしい志。男らしいすぐれた意気ごみのこと。
燦々…あざやかに輝くさま。

詩社四周年

螢雪四年能啓蒙。
詩情入筆字初工。
師恩海嶽以何報。
只合研精期有終。

螢雪四年　能く蒙を啓(ひら)き。
詩情　筆に入って　字初めて工。
師恩　海岳　何を以てか報じん。
只(た)だ合(まさ)に研精　有終を期すべし。

螢雪…貧苦にたえて勉学すること。苦労して学問をすること。苦学。
蒙…知識がなく道理にくらいこと。無知。
海岳…大恩のたとえ。
研精…詳しく調べて明らかにする。

謝野方翁見贈忠臣藏浄瑠璃音盤

野方翁が忠臣藏浄瑠璃音盤を贈られ、謝す。

春轉音盤夕爇香。
忠臣藏比獨參湯。
三絃奏出人情美。

春、音盤を転じて　夕べに香を焚く。
忠臣藏は比す　独参湯。
三絃　奏しだす　人情の美。

壓巻祇園一力場。　圧巻は祇園　一力の場。

音盤…レコード。
独参湯…歌舞伎で、いつ出しても必ず当たるといわれる出し物。
三絃…三味線の別称。

題　畫

斷崖遮風峙。　断岸　風を遮(さえぎ)って峙(そばだ)ち、
急湍飛雪廻。　急湍　飛雪廻る。
舟人停楫處。　舟人　楫(かじ)を停める処。
涵影一溪梅。　影を涵す　一溪の梅。

急湍…川で流れのはやい部分。早瀬。

癸卯孟春鶴岡秀堂來訪有詩次韻以酬

癸卯孟春　鶴岡秀堂来訪　詩有り、次韻以て酬いる。

忽見門前冰玉姿。　忽ち見る　門前　冰玉の姿。
美人林下已成詩。　美人　林下　已に詩を成す。
野梅曾贈山中客。　野梅　曾って贈る　山中の客。
翻向都城探舊枝。　翻って都城に向って　旧枝を探る。

冰玉…女の人の父と夫
都城…とりでや城壁をめぐらした都市。城市。また、都市にめぐらした城郭。

〔原韻〕

鐵骨横斜塵外姿。　鉄骨　横斜　塵外の姿。
樗園春信亦宜詩。　樗園　春信　亦詩に宜し。
徘徊憶舊門前佇。　徘徊　旧を憶うて門前に佇(たたず)めば。

清蕊幽香滿玉枝。　清蕊　幽香　玉枝に満つ。

塵外…世間の外。俗世間を離れた場所。
春信…春の訪れ。春の花が咲いたことを知らせる便り。花信。花便り。
蕊…植物の雄しべと雌しべ

〔野方翁次韻〕

年年仰見白梅姿。　年々　仰ぎ見る　白梅の姿。

欲寫冰魂難作詩。　氷魂を写さんと欲して　詩を作し難し。

鶴唳松聲幽韻足。　鶴唳　松声　幽韻　足る。

詎將蕪俚點瓊枝。　詎(な)んぞ蕪俚を将って　瓊枝に点ぜんや。

氷魂…まっ白な梅の花の形容。
鶴唳…つるの鳴く声。
幽韻…奥深く何ともいえない趣。
蕪俚…粗俗なこと。
瓊枝…玉で飾った美しい枝。また、玉がなるという珍しい木。

和韻寄秀堂野方両君　和韻して秀堂　野方両君に寄す。

門弟贈梅還寄詩。　門弟　梅を贈り　還た詩を寄す。

篇篇自有玉容姿。　篇々自ら　玉の容姿　有り。

憑何墨跡添深致。　何に憑(つか)ってか墨跡　深致を添う。

托得吟情筆一枝。　托し得たり　吟情　筆一枝。

深致…深い趣。(雅人深致…世俗を超越した風流人が持つ、深い趣。『世説新語』)
吟情…詩歌をつくりたいと思う気持ち。

静陵紀行　癸卯三月史山香玉同遊　静陵紀行、癸卯三月史山香玉同遊。

雨霽天如拭。
風和鳥語閑。
訂盟文字飲。
横斷豆州山。

雨霽(はれ)れて　天拭うが如く。
風和して　鳥語　閑なり。
訂盟　文字の飲。
横断　豆州の山。

訂盟…同盟・条約をむすぶ。
豆州…伊豆の唐風の呼び名。

同　土肥温泉今井荘

新舎温泉迸。
珍羞酒可斟。
雪山浮海遠。
畫檻近松林。

新舎　温泉　迸(とばし)り。
珍羞　酒　斟む可し。
雪山　海に浮んで遠く。
檻を画して　松林に近し。

珍羞…珍しくて美味しいご馳走。

同　清水市誌友大會

交情如水淡。
忽作十年知。
翰墨因縁匹。
拈華微笑時。

交情　水の如く淡きも。
忽ち作す　十年の知。
翰墨　因縁匹たり。
拈華微笑の時。

拈華微笑…禅宗で禅の法脈を釈尊から受け継いだとされる伝説。ことばを用いずに、心から心に伝えること。

同　片瀬温泉赤川寮

一川流到海。
枕畔夜來聲。
日出春山緑。
群鴉石上鳴。

一川　流れて　海に到る。
枕畔　夜来の声。
日　出でて　春山　緑なり。
群鴉　石上に鳴く。

同　石廊崎

巉嵓飜白浪。
臨海石廊危。
千里燈明滅。
照彰山水奇。

巉嵓　白浪を飜(ひるが)えし。
海に臨んで　石廊　危うし。
千里　燈明　滅す。
照彰す　山水の奇。

巉嵓…山がごつごつと切りたっているさま。

同　伊東温泉音無

坐湯心自適。
觴詠一閑人。
況有庖丁美。
山珍與海珍。

湯に坐し　心　自ら適す。
觴詠　一閑人。
況んや有り　庖丁の美。
山珍と海珍と。

觴詠…酒をのみ、詩歌をうたう。

同　詣玉泉寺弔阿吉墓

國歩艱難日。

同、玉泉寺に詣で阿吉の墓を弔う。
国歩　艱難の日。

嬌然挺一身。　嬌然　一身を挺す。
百年褒貶跡。　百年　褒貶の跡。
來弔落花春。　来り弔う　落花の春。

玉泉寺…静岡県下田市にある曹洞宗の寺院。山号は瑞龍山。本尊は釈迦如来。
幕末期にアメリカの総領事館として使用された寺として知られる。
阿吉…唐人お吉

お吉は本名を「斉藤きち」といい、天保十二年十一月十日、愛知県知多郡内海に、舟大工市兵衛の次女としてこの世に生をうけました。4歳のとき家族が下田に移り住み、十四歳で芸妓となりました。新内明鳥のお吉とうたわれるほどの評判と美貌でしたが、それが奉行所の目にとまるとことなり、17歳の時、法外な年俸と引替に心ならずもアメリカ総領事タウンゼントハリスのもとへ侍妾として奉公にあがることとなります。その後は、幕末、維新の動乱の中、芸妓として流浪の果てに下田にもどり、鶴松と暮らし髪結業を始めますが、ほどなく離別。さらに小料理屋「安直楼」を開業しますが、二年後に廃業しています。「唐人」という相も変わらぬ世間の罵声と嘲笑をあびながら貧困の中に身をもちくずし、明治二十四年三月二十七日の豪雨の夜、遂に川へ身を投げ、自らの命を絶ってしまいます。波瀾にみちた五十一年の生涯のあまりにも哀しい終幕でした。

お吉は身よりもなく、宝福寺の第十五代竹岡大乗住職が、慈愛の心で法名「釈貞観尼」を贈り、当時境内に厚く葬り、その後芸能人により新しく墓石も寄進され現在に至っています。

お吉の悲劇的生涯は、人間の偏見と権力、その底にひそむ罪の可能性と愚かさを身をもって私達に教えているようです。（「宝福寺書」より抜粋。）

国歩…国の歩み。国家の運命。
艱難…困難なことに出あって苦しみなやむ。つらく苦しいこと。
嬌然…なまめかしいようす。人の気をひくようななまめかしい姿。
褒貶…褒めることと、そしること。

賀雙石翁九秩

雙石翁の九秩を賀す。

鐵筆揮來壽似山。　鉄筆　揮い来って　寿　山に似たり。
閲霜九十尚童顔。　霜を閲すること　九十　尚　童顔。
雕蟲妙技自然韻。　雕虫の妙技　自然の韻。
磊磊永傳文墨間。　磊々　永く伝う　文墨の間。

閲する…時を過ごす。経る。
雕虫…細かい細工を施す。

磊々…度量が大きく、小さなことにこだわらないようす。磊落。

開同人會于熱海

十層高閣接青雲。
鳥語溪聲聽不聞。
惟有靈犀通一點。
同人意氣掃千軍。

同人会を熱海に開く。
十層の高閣　青雲に接す。
鳥語　渓声　聴けども聞こえず。
惟　霊犀一点通ずる有り。
同人の意気　千軍を掃う。

青雲…青い色をした雲。また、青空。
渓声…谷川の音。渓流の音。
靈犀通一点…心と心が通い合うこと。
李商隠　無題「身無綵鳳双飛翼、心有霊犀一点通」（身に綵鳳双飛の翼無きも、心に霊犀一点通ずる有り）
角の根元から先端まで白い筋の通っている犀を通天犀と称し、特に霊力があるとされていた。犀の角は中心に穴があって、両方相通ずるもの。よって「恋人と離れていても心と心が通い合うことができる」という意味で、その白い筋に喩えた。

次韻以賀古邨君華甲

侃諤使人號快哉。
華年頌壽引觴罍。
少時具味涔涔涙。
憂世卓論萌此來。

次韻以て古邨君の華甲を賀す。
侃諤　人をして快哉を号(ごう)する。
華年　壽を頌(しょう)して　觴罍を引く。
少時　具(つぶ)さに味う　涔々の涙。
憂世の卓論　此に萌(きざ)して来る。

侃諤…何ものも恐れず、正しいと思うことを盛んに主張すること。侃侃諤諤の略。
快哉…胸がすくような、よい気持ち。痛快。
觴罍…杯と酒樽
涔々…雨の多いさま。
憂世…世の中のことを嘆き憂える。
卓論…一際優れた説・論。

謝贈新茶

龍芽細沸瓦鐺中。
清寂旨參桑苧翁。
自入陽春八十八。
想君一夜摘薫風。

新茶を贈るを謝す。
龍芽　細に沸く　瓦鐺の中。
清寂の旨は参ず　桑苧翁。
陽春に入ってより八十八。
想う君一夜　薫風に摘せしを。

龍芽…茶の異名。
瓦鐺…大きな土鍋。(瓦当(軒先にふく丸瓦、または平瓦の先端の模様のある部分。)ではない。)
桑苧翁…陸羽。、唐の文筆家で、茶の知識をまとめた『茶経』3巻などを著述した。その内容には、単なる喫茶法を超え、茶道に至る精神性を垣間見ることができる。
薫風…さわやかな初夏の風。

函嶺雑詠

千年古木欝重重。
石氣沁衣嚴似冬。
湖畔停車一回首。
秋天高挿玉芙蓉。

千年の古木　欝(うつ)重々。
石気　衣に沁みて　厳冬に似たり。
湖畔　車を停めて　一たび首を回らせば。
秋天　高く挿む　玉芙蓉。

玉芙蓉…ボタン科のボタンの園芸品種。

同　十國嶺

吟鞋踏破白雲關。
險路羊腸積翠間。
四顧天空還海濶。
雙眸斂得十州山。

吟鞋　踏破す　白雲の関。
険路　羊腸　積翠の間。
四顧　天空　還た海　濶(はるか)。
双眸　斂(あつ)め得たり　十州の山。

吟鞋…靴の音。
羊腸…山道などが、羊のはらわたのように曲がりくねっている。
積翠…青山の形容。積み重なったみどり。
四顧…あたりを見まわす。四方を見まわす。
双眸…両方のひとみ。両眼。

癸卯八月催書海社展慰勞宴于鬼怒川温泉ホテル

癸卯八月　書海杜展慰労宴を鬼怒川温泉ホテルに催す。

勝地同遊聊慰情。　勝地　同遊　聊か情を慰む。
坐湯把酒話平生。　湯に坐し　酒を把(にぎ)って　平生を話す。
龍王峽畔石泉響。　龍王峡畔　石泉の響。
夜到枕邊成雨聲。　夜　枕辺に到って　雨声を成す。

石泉…岩の間からわく泉。

同　華嚴瀑

華嚴名勝眼前開。　華厳の名勝　眼前に開く。
鬼鑿神工何偉哉。　鬼鑿神工　何ぞ偉なるや。
巖際飛泉翻白雪。　巖際の飛泉　白雪を翻し。
直自中天落下來。　直ちに中天より落下して来る。

鬼鑿神工…奇巖靈石の天然の妙造。
飛泉…急に落下する水。滝。
中天…空の中央に近い部分。大空。

同　湯瀑

湯湖水溢注湯川。
忽漲白波清冽泉。
廣袤幾尋觀何壯。
巨岩壁上玉簾懸。

湯湖　水溢れて　湯川に注ぐ。
忽ち白波を漲らす　清冽の泉。
広袤　幾尋　観　何ぞ壮。
巨岩　壁上　玉簾　懸る。

清冽…清らかに澄んで、冷たいようす。
広袤…縦横のひろがり。広さ。面積。
玉簾…玉で飾った美しいすだれ。また、すだれの美称。玉だれ。

同　龍頭瀑

恠石如龍起伏連。
迸泉冷澁又盤旋。
化工妙現廣長舌。
俯仰乾坤大自然。

恠石　龍の如く　起伏して連る。
迸泉　冷渋　又盤旋。
化工の妙は現ず　広長舌。
俯仰　乾坤　大自然。

恠石…見なれない不思議な姿をしている石。
迸泉…ほとばしる泉。
冷渋…水が冷たく流れがつかえがちなこと。
盤旋…ぐるぐる回る。めぐり歩く。ひと所を回るだけで、進みかねる。
化工…造化の仕業。
広長舌…雄弁に、長々としゃべりまくること。長広舌。
俯仰…うつむいて下を見ることと、顔を上げて上を見ること。
乾坤…天と地。

偶　成

拒虎前門却進狼。
狐貍乗隙恣跳梁。

虎を門前に拒いで　却って狼を進む。
狐貍　隙に乗じて　恣(ほしいまま)に跳梁。

不如一笑竹林裡。　如かず一笑　竹林の裡。
只恐妖氣侵聖郷。　只　恐る　妖気の望郷を侵すを。

跳梁…好ましくないものが、思うままにのさばりはびこること。わがもの顔に振る舞うこと。横行。

戯贈醉佛先生

戯れに酔仏先生に贈る。

聞道扁桃腺。　聞くならく扁桃腺。
任地關節炎。　さもあらばあれ関節炎。
沈痾祇可療。　沈痾ただ癒すべし。
隨處有縄簾。　随処に縄簾あり。

沈痾…長い間なおらない病気。長わずらい。
縄簾…縄をいく筋も垂らして、すだれとしたもの。なわのれん。

世態漫唸

書究摩崖字。　書は摩崖の字を究め。
學通和漢蘭。　学は和漢蘭に通ず。
心層藏遠近。　心層　遠近(トーチカ)を藏し。
吐語使人寒。　語を吐けば人をして寒からしむ。

遠近…(訓読みするとトーチカ)＝コンクリートで作った、小形の要塞で。銃砲をそなえている。

荻野謙堂翁頌徳碑竣成

兩正臨池永誨人。　両正　臨池　永く人に誨(おし)える。

謙虚揖讓徳成隣。
滿門桃李馨神域。
豊碣仰看千歳春。

謙虚　揖讓　徳　隣を成す。
滿門の桃李　神域に馨る。
豊碣　仰看る　千歳の春。

荻野謙堂…愛知の人。名は勇、号を謙堂と称し、書を大島君川に学び、中部日本書道会の理事長や顧問等を務め、中部書壇を代表する作家として活躍した書家で、昭和十二年には、黒木拜石と共に『書学新講』を公刊した。安城市福釜町の神明神社に頌徳碑が建てられている。
謙虚…自分の能力・才能・知識などを誇らずへりくだって慎ましい様子。控え目で素直な様子。
揖讓…物事をするとき、武力を用いたり強制したりすることなく、穏やかな態度で行うこと。
徳成隣…『論語』里仁編の「徳不孤　必有隣」(徳は孤ならず、必ず隣有り)から引用。
神域…神聖な神社の境内。また、神聖な領域。
豊碣…石碑。

黒部峡谷

絶壁千尋峙似屏。
谿行百里氣冷冷。
鳴泉穿石潭心碧。
霜樹帶雲山自靈。

絶壁千尋　峙(そばだ)って屏に似たり。
谿を行くこと　百里　気　冷々。
鳴泉　石を穿(うが)ちて　潭心　碧。
霜樹　雲を帯て　山　自ら霊。

絶壁…切り立った険しい崖。断崖。
千尋…測り知れない深さ・長さ。
潭心…深い渕の底。

錬心會十五周年招飲席上聞主翁明年達古稀即次秀堂子感懐韻

錬心会十五周年招飲席上主翁明年古稀に達すると聞き即ち秀堂子感懐の韻に次す。

翰墨風流有宿縁。
臨池弄韻鬢霜遷。

翰墨の風流　宿縁あり。
臨池　弄韻を弄び　鬢霜　遷る。

綺筵懽語多含蓄。

耕耨心田七十年。

綺筵の懽語　含蓄　多し。

耕耨　心田　七十年。

宿縁…前世からの因縁。宿因。宿縁。

鬢霜…鬢の白髪。

綺筵…しきもの。美しいむしろ。

耕耨…耕したり、土をまぜ返して除草したりする。田畑の手入れをする。

心田…心地に同じ。「こころ」を田地にたとえた語。